

保育の造形表現領域における「色水遊び」とその広がり

山 中 慶 子

Colored Water Play and Various Extensions of It in the Field of Artistic Expression in Early Childhood Education

Keiko YAMANAKA

キーワード：色水遊び、混色、絵の具

1. はじめに

『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』及び『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』には、共通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が記されている。その中で、豊かな感性と表現では「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。」とある¹⁾。

幼児は、生活の中で様々な環境に関わりながら、美しいと感じるものや面白いと感じるものに出会い、気づきや新しい発見を日々重ね、その心の動きを持ち得る手段で表現しようと試みるという。それは、声や動きであることも多いが、素材となるものの仲立ちによって表現されることも多い。幼児が表現の素材となるものの特性に触れ、表現の仕方に気づいたとき、これまで感じたことや考えたことを創造し表現する力は豊かに広がっていく。保育者は、一人一人の幼児が様々な表現する楽しさを大切にするとともに多様な素材や用具に触れながらイメージやアイデアが生まれるように環境を整えていくことが必要であるとされる²⁾。

幼児が表現を楽しむ素材として身近にあるものの一つに、水彩絵の具があげられる。幼児自らが色の組み合わせを楽しみ、個性を表現出来る水彩

絵の具という素材は、幼児の表現意欲を満足させ、表現する喜びを十分に味わわせる可能性を秘めている。水彩絵の具の魅力は、水の量で変化する透明感のある色彩であるが、もう一つの大きな特性は、クレヨンやマーカーでは難しい「混色」ができるという点である。

しかし、保育の現場では、幼児の1年間の製作作品を見ると、準備の簡単なクレヨンやマーカーを頻繁に使用する傾向にあると推測される。水彩絵の具を使用する場合は、原色の水彩絵の具、または、保育者が予め混色しておいた水彩絵の具を使うことが多い。筆者の経験によると、年長児になって初めて個人で水彩絵の具を扱うが混色の体験までは至らないということも少なくない。

そこで本稿では、幼児が色の混色の楽しさを体感させられると推測される「色水遊び」を実践し、さらに幼児の自発的な造形表現や遊びを引き出すと考えられる保育者側の環境設定を検討する。

2. 水彩絵の具のメリット・デメリット

筆者の経験を通して得られた、保育における表現の素材として水彩絵の具を使用するメリットとデメリットを表1に示す。

保育者自ら行う製作では、絵の具を扱うことのメリット(1)~(3)の理由によって水彩絵の具は頻繁に使用される。

一方、幼児個人が扱う素材として水彩絵の具が

表 1. 水彩絵の具使用のメリット・デメリット

水彩絵の具使用のメリット
(1) 混色によって多彩な色をつくることのできるため、表現の幅が広がる。 (2) 混色の割合や水の量によって、色合いを変化させることができる。 (3) 様々な塗り方や道具（筆や指、スタンプ）を使うことによって、塗り心地や質感の違いを楽しむことができる。
水彩絵の具使用のデメリット
(1) 準備片付けに時間がかかる。 (2) 衣服を汚しやすい。 (3) パレット、仕切りのある水バケツの使い方が幼児には難しい。 (4) 色を塗った部分が乾くのに時間がかかる。 (5) パレット上できれいな混色をするのが難しい。(絵筆の扱い方や色の選択において。)

敬遠される理由として、デメリット(1)～(5)を挙げた。保育者は、水彩絵の具の優れた特性は認識しているが、登園から昼食までの時間、昼食後の降園までの時間を考えると、水彩絵の具を使った造形表現は事前準備や片付けに時間がかかり製作時間を十分に確保するのが難しいのが現状である。また、パレット上の混色では、筆を十分に洗えていないと色が濁ってしまう。黒や紺などの明度が低い色を混ぜてしまうと、どのような色もほとんど黒色になってしまうことも幼児が体験して初めて気づくことである。しかしその場で色を洗い流し、また一から色を作ることを援助するのは、保育者一人では困難である。

3. 「色水遊び」のメリットとデメリット

色水は、保育者が事前に準備することも簡単なおうえ、「飲んではいけない」という点を除いては、幼児が扱うのにも安全で大勢で楽しめる素材の一つである。約束事を理解するのが難しい年齢の子どもたちを対象とするならば、誤飲の危険性を考慮し、食紅を使った色水が適している。しかし4～6歳の幼児は約束事を理解できるので、水彩絵の具を用いた絵の具で問題ない。色水での混色であれば、自分が好まない色が出来てしまっても、排水に流し、すぐさま新たな色づくりにチャレンジすることができる。

加藤は「5歳児の遊びに見られる科学的萌芽」

(2013)³⁾において、遊びの際に発せられる幼児の言葉を調査し「色水遊びは科学的萌芽の基礎的な部分を構成していく気づきにつながるつぶやきや発言を誘発する遊びとして適している」としている。科学的萌芽の基礎的な部分とは「遊びの中で、物に働きかけたときに観察できる気づき」であるという。

4. 色水遊びで使う水彩絵の具

色水遊びでは、幼児に親しみのあると推測される色の中で、色の三原色⁴⁾に最も近い絵の具、青色・赤色・黄色を使用する。それに加えて、白色も使用することにした。白色を使用することは、有彩色同士を混色する場合よりも白色を混ぜた場合の色を予想しやすいと考えられる。白色を混色して得られる乳白色があることによって、色の表現が広がるのが期待される。

5. 色クイズでのアンケート調査

松村・中田は、3～5歳児の幼児に10色の色紙を見せ名前を聞くという調査を行ない、赤、黄、青、白などに対して、黄緑、紫、茶に対する認識が遅れているとの結果を得た⁵⁾。松村・中田は「B. Berlin&P.Kayによると、色彩用語は、White,Black<Red<Green, Yellow<Blue<Blown<Purple, pink, Orange, Grayのように進化するといわれる⁶⁾」と記し、幼児の色の認識もこのように発達するのではないかとしている。

幼児が色に興味を持ち、自分で作りたい色を作るために試行錯誤するとき、「この色とこの色を混ぜたらどうなるか」という知識は、何歳頃に備わっているのか、また、未経験であっても予想を立てて色を作ることが出来るのかについて、T幼稚園の年中及び年長児に対してアンケート調査した。

5-1. 調査方法

園側によれば、調査対象の幼児は、それまでの保育の中で意図的な絵の具の混色の経験がなかった。調査用紙はクイズ形式にした。(図1)。色に関心を持ってもらうため、最初にペープサートを

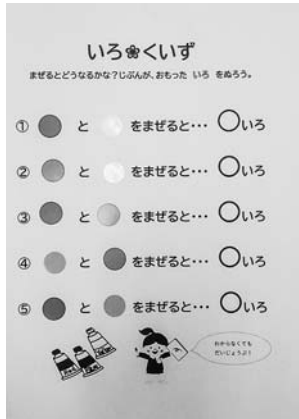


図1. いろいろクイズ



写真1. ペープサート「おはようクレヨン」

演じた(写真1)。ペープサートは「おはようクレヨン」というタイトルで、赤・緑・青・ピンク・白・茶・黄・橙クレヨンが登場する。

..... 解説

文字の読めない幼児もいるので、見て分かるよ

うに色シールで色を示した。調査用紙右端の○に、自分が予想した色をクレヨンで塗るように指示する。分からないところは空白で良いと伝える。一例として、青色と白色の絵の具を混ぜて「水色」ができるところを実演した。

調査結果を表2に示す。

表2. いろいろクイズ調査結果

色クイズ	年中(4, 5歳児) 39名							
赤色と白色を混ぜたら何色になるかな	赤 (14) 35.9%	ピンク (11) 28.2%	紫 (5) 12.8%	青 (4) 10.3%	灰色 (2) 5.1%	その他 (3) 7.7%		
青色と赤色を混ぜたら何色になるかな	紫 (14) 35.9%	青 (5) 12.8%	ピンク (4) 10.3%	赤 (3) 7.7%	黒 (2) 5.1%	灰色 (2) 5.1%	その他 (8) 20.5%	解答なし (1) 2.6%
黄色と赤色を混ぜたら何色になるかな	赤 (8) 20.5%	ピンク (7) 17.9%	黄 (6) 15.4%	茶 (4) 10.3%	オレンジ (3) 7.7%	黒 (3) 7.7%	その他 (6) 15.4%	解答なし (2) 5.1%
青色と黄色を混ぜたら何色になるかな	黄緑 (7) 17.9%	黄 (7) 17.9%	緑 (4) 10.2%	黄土色 (2) 5.1%	うすだいだい (2) 5.1%	茶 (2) 5.1%	その他 (8) 20.5%	解答なし (3) 7.7%

色クイズ	年長(5, 6歳児) 40名							
赤色と白色を混ぜたら何色になるかな	ピンク (39) 97.5%	白 (1) 2.5%						
青色と赤色を混ぜたら何色になるかな	紫 (34) 85.0%	緑 (4) 10%	黄緑 (1) 2.5%	ピンク (1) 2.5%				
黄色と赤色を混ぜたら何色になるかな	オレンジ (33) 82.5%	紫 (3) 7.5%	黄 (2) 5.0%	黄緑 (1) 2.5%	緑 (1) 2.5%			
青色と黄色を混ぜたら何色になるかな	緑 (29) 72.5%	黄緑 (3) 7.5%	オレンジ (3) 7.5%	青 (2) 5.0%	うすだいだい (1) 2.5%	茶 (1) 2.5%	黄土色 (1) 2.5%	

(太線の囲みは正解の色)

5-2. 年中児の結果

「青色と赤色を混ぜる」の正解率が35.9%と最も高かった。「黄色と赤色を混ぜる」の正解率は、7.7%と低かった。

「赤色と白色を混ぜる」の解答が「赤色」、「黄色と赤色を混ぜる」の解答が「赤色」「黄色」のように、「色を混ぜても、元の色のまま」という解答が、各問において2～3割あった。「青色と黄色を混ぜる」の解答として「黄緑」「緑」があったが、色の割合でどちらも可能であるため、正解とした。

「色を混ぜたら、どうなるか」という質問が理解できない幼児がいた。自分が好きな色を塗るという幼児や、クレヨン赤と青の2色を交互に塗り重ね、「紫にみえる」というような実験を行う幼児がいた。

5-3. 年長児の解答結果

どの色の混色も、7～8割の高正解率だった。

解答の色数のばらつきが少なく、元のままの色という解答も少なかった。

問題を出してすぐに「わかった」と塗り始める幼児が多く、正解がわからない子も問題にある色を選ばないことから、「色と色を混ぜたら色が変わる」という認識を持っていると推測される。

5-4. 考察

年中児と年長児の結果を比べると、どの混色に対しても年長児の正解率が大幅に上がっている。また、「色と色を混ぜても色は変わらない」と考えた年中児が2～3割いたのに対して、年長児は問と同じ色を選んだ幼児が0.25～0.5割と少ないことから、「色と色を混ぜたら色は変わる（他の色になる）」という考えをもっていると推測される。これは、4～5歳から6歳になるこの時期に、日常の中で（意図的でなくても）色が混ぜられる体験から色への興味が湧き、知識として習得されたと考える。「お母さんが言っていたから…」と

表3. 色水遊びⅠの活動計画

造形表現活動計画		対象：40名（年中児 2クラス）		
活動名 色水を混ぜてあそぼう	子どもの実態・育ちの願い： 色に興味のある子どもたちが、混色の経験は少ない。色水あそびの混色体験から、色の混ざりを楽しみ、個々の発見につなげていきたい。			
ねらい：色の混色を工夫して楽しむ。 内容 ○4色の色水から、いろいろな容器や道具を使って混色を楽しみ、オリジナルの色をつくる。 ○友達と色の違いを比べ、作り方を教えあいながら、気づきを得る。				
材料・用具	環境構成		子どもの活動／予想される動き	保育者の援助
桶 4つ 絵の具（赤・青・黄・白） ペットボトル プリンカップ スプーン・タオル	○園庭に絵の具を溶かした色水4色を準備しておく。（赤・青・黄・白） ○色水傍の台に、ペットボトルやカップなど容器類をまとめておく。	0:40	<ul style="list-style-type: none"> ●汚れても良い服装に着替える。またはスモック着用。 ●園庭に出て、ペットボトルやパック、プラ容器を選び、色水遊びをする。 ●色水の汲み方や注ぎ方、道具の使い方を工夫したり、友達と教えあったりする。 ●色が変わる様を体感し、友達や先生に伝え合う。 ●「どうしてかな」「なんでこんな色になるのかな」と疑問を持ったり、作りたい色づくりにチャレンジしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ■「きれいな色だね」といった共感や「赤と青混ぜたら何色になった？」などの言葉かけを行い、色が変わることへ意識をむける。 ■道具の使い方や混色の工夫が見られた子には、他の子にも教えてあげるよう促す。 ■幼児の気づきなどを確認しながら、似ている色を並べてみたり、集めてみたりする。 ■片付けの指示。

いう発言があり、それは情報をキャッチする幼児の受け皿が育ってきたからとも考えられる。

日常生活の中で様々な現象に幼児が興味・関心を示す時期に、造形表現の基礎となるような素材体験を多く経験することは、その後の造形表現に大きな影響をあたえると推測される。

6. 活動「色水遊びⅠ」

6-1. 活動計画と結果

年中児2クラス(40名)に対して、アンケート調査「色クイズ」の正解は示さず、「明日の色水遊びで実験してみようね。」と伝えて、翌日の自

由保育の時間に色水遊びを実践した。

本活動の前半は主としてクラス担任が担当し、筆者は色水遊びから広がる後半の活動を担当した。

濡れても良い恰好で裸足になり、サラサラした砂の感触や水を含んだ泥の感触も楽しめる水遊びを兼ねた活動とした。ペットボトルの蓋は用意しなかった。活動計画を表3に示す。保育者の援助、幼児の行動と発語を時系列でまとめた結果を表4に示す。

6-2. 考察

色水遊びを始めた際、迷いなく容器を取りに行

表4. 色水遊びⅠにおける保育者の援助および幼児の活動・発語

保育者の援助	幼児の活動	幼児の発語
「色水桶の中に他の色水を入れない」 約束をし、色水遊びを開始する。	好きな色水をペットボトルやカップ に入れていく。 スプーンですくって注いだり、ペット ボトルをそのまま入れて汲みだしたり する。	「色が変わった。」 「わー、変な色になっちゃった。」 「見て見て、緑になった。」 幼「ブドウゼリーみたい」 保「何色を混ぜたの？」 幼「青と赤だよ！」
似ている色を近くに集めてみよう と声掛けをする。	できた色を台に置く。(写真2) 似ている色を近くに集める。	「〇〇ちゃんの色と似てるね。」 「紫だけど、ちょっと色が違う。」 「白と青を混ぜたけど、さっきの色と 同じにならなかったよ。」
赤・オレンジ・黄色・黄緑・緑・青緑・ 青・紫の直線のグラデーションが出来 た。		「いっぱい色ができた。」 「この色がきれい。」 「ジュースみたい。」 「変な色(濁った色)もあるよ。」
園庭に円形のグラデーションを作っ てみる。見本となる色を円形に並べ、 中心に白系を配置する。		
残りのペットボトルやカップも、カ ラーサークルの似ている色の近くに 置いてみよう提案する。	自分たちで作った色に似ている色 を探しながら、カラーサークルに加えて いく。(写真3)	「あ、同じ色があった。」 「先生、この色似てるよね。」
園庭に大きなカラーサークルがで きあがった。(写真4)(図3)	少し離れて、皆で眺める。	「わあ、きれい。」 「レインボーだ！」 「色が繋がってる。」
「たくさん色ができたけれど、みん なが使った色水は、赤・青・黄・白の 4色だったよね。その4つの色だけ で、こんなにたくさん色ができた よ。すごいね。」という話をし、活動 を終了する。	作った色水を砂場に流したり、川を 作って遊んだりしながら片付けをす る。	「面白かった。」 「また明日もしたい。」 「色クイズの答え、わかったよ。」

き、それぞれ好みの色の桶の前に座り込み一心に色水を汲んでいる姿は、幼児の探求心の現れと捉えられる。混色を楽しむ時間を最初に決めてしまわず、幼児たちの様子を見ながら存分に活動できるようにしたことによって満足感を与えられたと考えられる。

活動の中で幼児の気づきの言葉や疑問の言葉を保育者が拾い、「色を並べてみる」→「似ている色を集めてみる」→「円形に並べてみる」→「似ている色を探してみる」という活動を流動的に発展させていった。次々に発展していく活動から、幼児のさまざまな発語が聞かれた。色を探す活動では幼児が色水のボトルをもって真剣に色を探し、ここだと思う場所に色水を置いていって、全員でカラーサークルを完成させた。

完成したカラーサークルを見て気づいたことは、青色と赤色を混ぜてできる紫色や、黄色と青色を混ぜてできる緑色は多いが、赤色と黄色を混ぜてできるオレンジ（橙）色のグループが少なかったことである。

その原因は、色水桶の配置（図2）にあったと推測された。赤・青・黄・白と横並びに配置したため、座り込んで色を作る幼児は、隣の色を混ぜやすいと考えられる。「この色をつくろう」よりも「この色とこの色を混ぜたら何色になるかな」という意識が強かったと推測される。

白が一番端に設置したにも関わらず、多くの混色活動で使われていた。活動開始直後「牛乳だ」「カルピスみたい」という声があがったことから、色水遊びにおいて「白」は混ぜてみたい色であると考えられる。

幼児一人ひとりによる色水の表現から始まった色水遊びが、保育者の援助によって、集団として

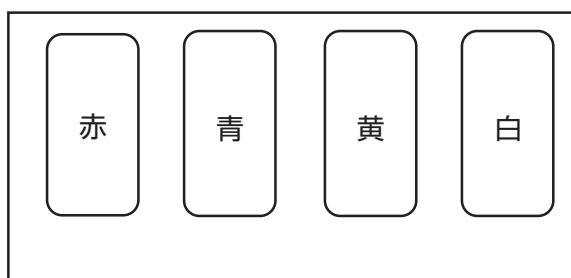


図2. 色水桶の並び

の表現活動に発展していった。このような幼児の様子や発語から発展させていく活動においては、保育者がさまざまな表現活動の知識・技能を基に、幼児たちに柔軟に対応していくことが重要である



写真2. 活動の様子



写真3. 似ている色を探す幼児たちの様子



写真4. 園庭にできた大きなカラーサークル

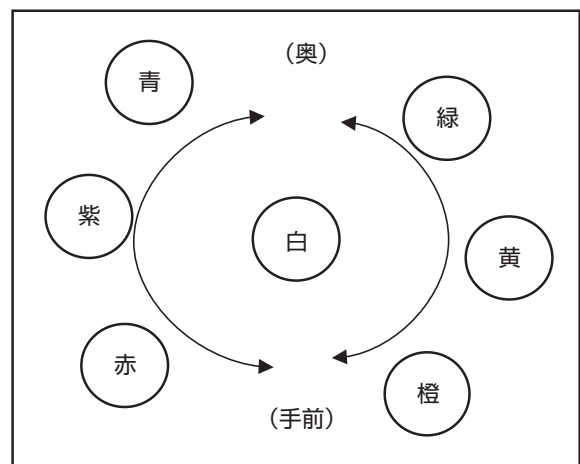


図3. 写真4における色の配置

と考えられる。

本活動における幼児たちの活動の様子や発語、あるいは筆者が感じ取った表情から、「色水遊び」が幼児に色の混色の楽しさを体感させられる活動

であると考えられる。

次に、幼児の自発的な造形表現や遊びを引き出すと考えられる保育者側の環境設定を検討する。

表 5. 色水遊びⅡの活動計画

造形表現活動計画		対象：15名（年中8名 年長7名）		
活動名	子どもの実態・育ちの願い： 色に興味のある子どもたちが、混色の経験は少ない。色水あそびの混色体験から、色の混ざりを楽しみ、個々の発見につなげ、そこから広がる仲間遊びを豊かにしていきたい。			
ねらい：色の混色を工夫して楽しみ、そこから広がる遊びを豊かにする。				
内容 ○4色の色水から、いろいろな容器や道具を使って混色を楽しみ、オリジナルの色をつくる。 ○友達と色の違いを比べ、作り方を教えあいながら、気づきを得る。 ○作った色水から、仲間との遊びに発展させ、工夫して遊ぶ。				
材料・用具	環境構成	時間	子どもの活動／予想される動き	保育者の援助
桶 4つ (赤・青・黄・白 絵具) ペットボトル プリンカップ スプーン・ 漏斗 タオル	○事前に、汚れても良い服装で参加の旨を保護者に伝えておく。 ○園庭に絵の具を溶かした色水4色を準備しておく。(赤・青・黄・白) ○色水傍の台に、ペットボトルやカップなど容器類をまとめておく。	0:00 0:05	●汚れても良い服装に着替える。またはスモック着用。 ●色水マジックを見て、これからの活動の話と約束を聞く。 ●園庭に出て、ペットボトルやパック、プラ容器を選び、色水遊びをする。 ●色水の汲み方や注ぎ方、道具の使い方を工夫したり、友達と教えあったりする。 ●変わる色の不思議を体感し、友達や先生に伝え合う。 ●「どうしてかな」「なんでこんな色になるのかな」と疑問を持ったり、作りたい色づくりにチャレンジしたりする。	■園庭の準備／部屋の準備(各コーナーの設置。道具は子どもたちの目につかないところに置いておく。) ■色水マジックを見て、子どもが「やってみたい」と思うような言葉かけをする。 ■約束の確認。
約束の紙	○部屋の中ホワイトボードにお約束の紙をはる。 「×のみません」 「×へやのなかでフタをあけません」 ○濡れた個所を拭くタオルを近くに数枚用意しておく。	0:30	◎「好きな色を1本つくる」 ●好きな色ができたら、蓋を閉めて部屋に持ち帰る。 ●自分の興味のある遊びを始める。 ◇工作コーナー ◇お店屋さんごっこコーナー ◇自動販売機コーナー ◇その他	■「きれいな色だね」といった共感や「赤と青混ぜたら何色になった？」などの言葉かけを行い、色が変わることへ意識をむける。 ■道具の使い方や混色の工夫が見られた子には、他の子にも教えてあげるよう促す。 ■並べたり、友達の色と比べたりするような言葉かけをする。
画用紙 折り紙、 マジック、 ハサミ、 セロハンテープ スズランテープ かご、 紙のお金 箱 自動販売機 (段ボール)	○部屋の中に「工作コーナー」「お店屋さんごっこコーナー」「自動販売機コーナー」を作っておく。 ○工作コーナーの机には新聞紙を敷いておく。 ○手持ちかごや、おもちゃのお金をまとめて置いておく。	1:00 1:10	●お友達の遊びをまねたり、遊びを発展させたりしながら工夫して遊ぶ。 ●協力して片付けをする。 ●片付け後、色水のペットボトルは家庭に持ち帰ってよい。	◇ペットボトルに好きな色を1本作るよう言葉かけをする。 ■蓋を閉めた容器をタオルで拭いて、部屋に入るよう促す。 ■子供たちの安全を確認しながら、それぞれの遊びを見守る。 ■「これいくらですか」「どうやって作ったの」など遊びが発展するような言葉かけを行う。 ■片付けの指示。

表 6. 色水遊びⅡにおける保育者の援助および幼児の活動・発語

保育者の援助と環境設定	幼児の活動	幼児の発語
<p>活動の導入として、筆者が色水マジックを行い、混色への興味を向ける。</p> <p>園庭に、4色（赤・青・黄・白）の色水桶と、ペットボトルやカップ類を配置。</p> <p>幼児の発語に耳を傾け、相槌をうったり、感想を述べたりする。</p> <p>各自、好きな色のジュースが完成したら、蓋を閉めて部屋に入るよう伝える。</p>	<p>園庭に出て、漏斗やカップを使って、ペットボトルに色水を注ぎ混色をする。</p> <p>○Aちゃんは「いちごみるく」を作ることにした。赤と白の割合を何度も変えて違うピンクを作り出す。途中、黄色を少量入れてページ色になってしまったが、最後は自分の好きなピンク色を作った。</p> <p>○B君は、とにかく全部の色を混ぜたい様子。何度もグレーや茶色の色水を作った。</p> <p>○C君は、紫を作り、オレンジを作り、緑を作るたびに保育者に見せにきた。「わあ、きれいな色だね。」と言うと、満足そうにその色水は流してしまい、次の色を作る。色を作ることがとても楽しい様子である。</p> <p>○Dちゃんは、黄色を入れたペットボトルに青を注ぎ、ボトルを振らずに色が2層になっている様を楽しんでいた。</p>	<p>「見て。ピンクになった。」 「いちごミルク作ろう。」</p> <p>「わー、茶色になった。コーヒー牛乳みたいだね。先生飲む？」 「変な色。」</p> <p>「見て見て。こんな色になった。」 「オレンジジュースできた。」 「おいしそう。」 「次は白も混ぜてみよう。」</p> <p>「見て。きれいだよ。」 「あ、だんだん（混ざって）色が変わってきた。」</p>
<p>保育室には「工作コーナー」「お店屋さんコーナー」「自動販売機コーナー」がある。</p> <p>安全に遊べているか、順番に遊べているかを見守る。</p> <p>片付けの指示。</p>	<p>ほとんどの幼児が、まず「工作コーナー」で装飾を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・画用紙に文字を書いてラベルを作る。(写真5) ・スズランテープを巻いてスカートにする。 ・ペットボトルに顔を描く。 ・友達と相談しながら画用紙を切って貼る。 ・蓋の部分にテープを巻いて装飾する。 ・遊び途中に、また工作コーナーに戻って装飾をする。 <p>「自動販売機コーナー」 お金を入れて、穴からペットボトルを落とし、下の取り出し口から取るという動作を繰り返す。 たくさんのジュースを並べてみたり、早さを競ったりする遊びを行う。(写真6)(写真7) お金を入れる人とジュースを落とす人に分かれて遊んだり、効果音をつけて遊んだりする。</p> <p>「お店屋さんごっこコーナー」 カゴにジュースを入れて持ち運ぶ。 机の上にジュースを並べて、箱をレジに見立てて遊ぶ。(写真8) ままごとセットも出してきて、いろいろな食品が買えるようになった。 部屋のなかにあるキッチンを冷蔵庫に見立ててジュースを冷やしたり、食器を並べてごはんの支度をしたりする。(写真9) ペットボトルを積み上げて、高さを競う。</p>	<p>「何ジュースにしようかな。」 「テープも貼ってみよう。」 「(顔を描くと)可愛くなった。」 「それ、どうやって作ったの。」 「先生、これで遊んでもいい？」</p> <p>「どうやって遊ぶの？」 「おかねがある。」 「ここにペットボトルが入るよ。」</p> <p>「次、私にさせて。」 「ピッピッ。ガッシャーン。」 「どのジュースがいい？」 「早く早く。落として。」</p> <p>保「これは、いくらですか。」 幼「200円です。」</p> <p>「何がいますか？」 「これください。はい、お金。」 「ジュースは冷やすと美味しいよ。」 「見て。高いでしょう。」</p> <p>「ジュース持って帰っていいですか。」 「自動販売機、またしたいから置いててね。」 「またお店屋さんごっこしたいな。」</p>



写真5. ラベルがついたボトル



写真6. 自動販売機で遊ぶ様子



写真7. ジュースに見立てた色水を並べた

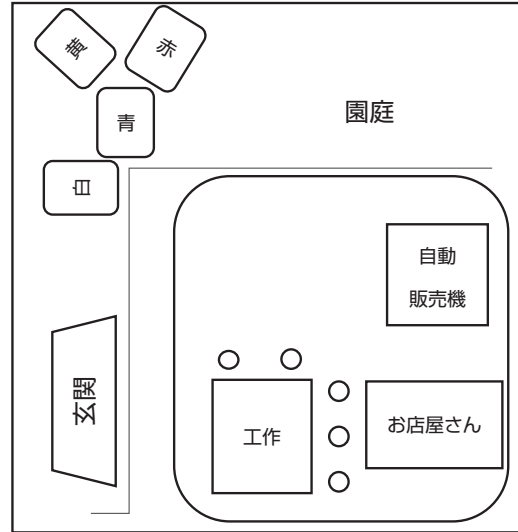


図4. 環境図



写真8. 「いくらですか」「〇円です」のやりとり



写真9. 冷蔵庫でジュースを冷やす真似

7. 活動「色水遊びⅡ」

7-1. 活動計画と結果

T幼稚園における夏休みの預かり保育では、幼児の体力面や生活リズムを考慮して午睡の時間を設けているため、本活動は、午前中登園してから昼食時間までを使って実践する。

本活動では、子ども主導型（ねらいを潜ませた環境設定による援助）と、活動誘導型（主に活動モデルを提示して誘導する）を組み合わせで行う⁷⁾。ねらいを潜ませながら、小さな決定は個々の子ど

もたちに委ねていく活動とし、大きく2つに分ける。

- ① 園庭に絵の具の色水4色（赤・青・黄・白）の大きな桶を用意する。幼児が色水を工夫して注いだり混ぜ合わせたりできるように、大きさの異なるペットボトル、プリンカップ、漏斗、プラスチックコップ、小型のおたま等を用意する。年齢に合わせて、様々な道具を用いながら混色を楽しむ姿が期待される。
- ② 園庭で混色を体験した後、保育室で遊びを自

由に展開できるように環境を整えておく。ジュースのラベルを作ったり容器の装飾を施したりする「工作コーナー」、買い物かごやお金を予め置いておく「お店屋さんごっこコーナー」、段ボール箱を自動販売機に見立てての「自動販売機コーナー」である。これらの環境設定によって幼児たちの内発的製作活動や遊びへの発展につながることをねらいとする。

本活動の計画を表5に示す。保育者の援助、幼児の行動と発語を時系列にまとめたものを表6に示す。環境図を図4に示す。

7-2. 考察

本活動は、「好きな色を作る」活動から開始した。前述の色水遊びⅠでは、「色を混ぜたらどうなるか」という実験的要素が大きかったのに対して、「好きな色を作る」という活動は、好きな色をイメージし創造するという点において、より造形表現的活動である。

保育室での活動では、保育者はほとんど指示や助言を行わず、安全面の注意と工作の補助、幼児の遊びの中での声掛けのみを行った。保育室に入ってからはお店屋さんごっこ等の遊びを始める幼児が多いと予想していたが、全員が何かしらの装飾を行った。これは、自分が作り出した色のジュースを装飾して、より良く仕上げたいという幼児の自発的造形表現の表れと捉えられる。

異年齢で男女混合の活動では、遊びに対する興味関心は異なる。本活動では複数のコーナーを設定したことで、それぞれのコーナーでのびのびと遊びを展開することができたので、個々の幼児の欲求を満たすことができたと推測される。さらに、保育者が設定した遊びに留まらず、幼児の発想によって別の遊びへ展開され、既存の遊具を加えながら遊びが大きく広がっていくことも確認された。

8. まとめ

本稿では、幼児が色の混色の楽しさを体感させられると推測される「色水遊び」を実践し、さらに幼児の自発的な造形表現や遊びを引き出すと考えられる保育者側の環境設定を検討した。得られ

た結果を以下に示す。

- (1) 「色水遊びⅠ」及び「色水遊びⅡ」の活動の中で得られた幼児たちの活動の様子や発語、あるいは筆者が感じ取った表情から、幼児たちが色水による混色を楽しんでいることが十分推測された。「色水遊び」を通して幼児に混色の楽しさを体感させることができたと考えられた。
- (2) 「色水遊びⅡ」では、幼児たちに混色の楽しさを体感させたあと、適切な環境を設定したことによって、幼児の自発的造形表現や自発的遊びを引き出すことができたと考えられた。幼児たちの活動の様子、発語、あるいは表情から十分推測された。

本稿の実践結果から、「色水遊び」は保育において有意義な造形表現活動と考えられる。幼児の製作活動の後から広がる遊び、あるいはそのための環境の設定について、今後の課題として研究を深めていきたい。

謝辞

本研究にご協力くださったT幼稚園の理事長、園長、主任、教職員の方々、園児の皆様に厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 『平成29年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』チャイルド本社(2017) pp.7-9, pp.32-33, pp.63-65
- 2) 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』フレール館, p.72
- 3) 加藤尚裕(2013)「5歳児の遊びに見られる科学的萌芽—砂場遊び、シャボン玉遊び、色水遊び、泥だんごづくりの事例を通して—」『国際経営・文化研究』Vol.18, No.1, p.26
- 4) 小島尚美(1997)『色の事典』西東社, p.11
- 5) 松村佳子, 中田真代(1991)「幼児の色の認識について」『奈良教育大学教育学センター研究報告』p.71
- 6) 江幡潤(1902)『色名の由来』東京書籍, p.16
- 7) 檜英子(2008)『保育を開く造形表現』萌文書林, p.126